續膝栗毛

二十五

120
43
53

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

續膝栗毛四編

上

120
43
53

東京圖書館

和書門 小說類
二六函 一二架 九一號 四三冊

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

TOKYO LIBRARY
東京都立図書館
FOUNDED BY MOMBUSHO

明治十年交換

續膝栗毛四篇叙

そもそも街道を通行せしこと、横川の印刷所を省略して、かへらぬ等閑道中膝栗毛、其所、移轉年の日時宿りはねして、秀與の上版畫おのおのも岐路栗柳

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』　請求記号 120-53
ガラス使用

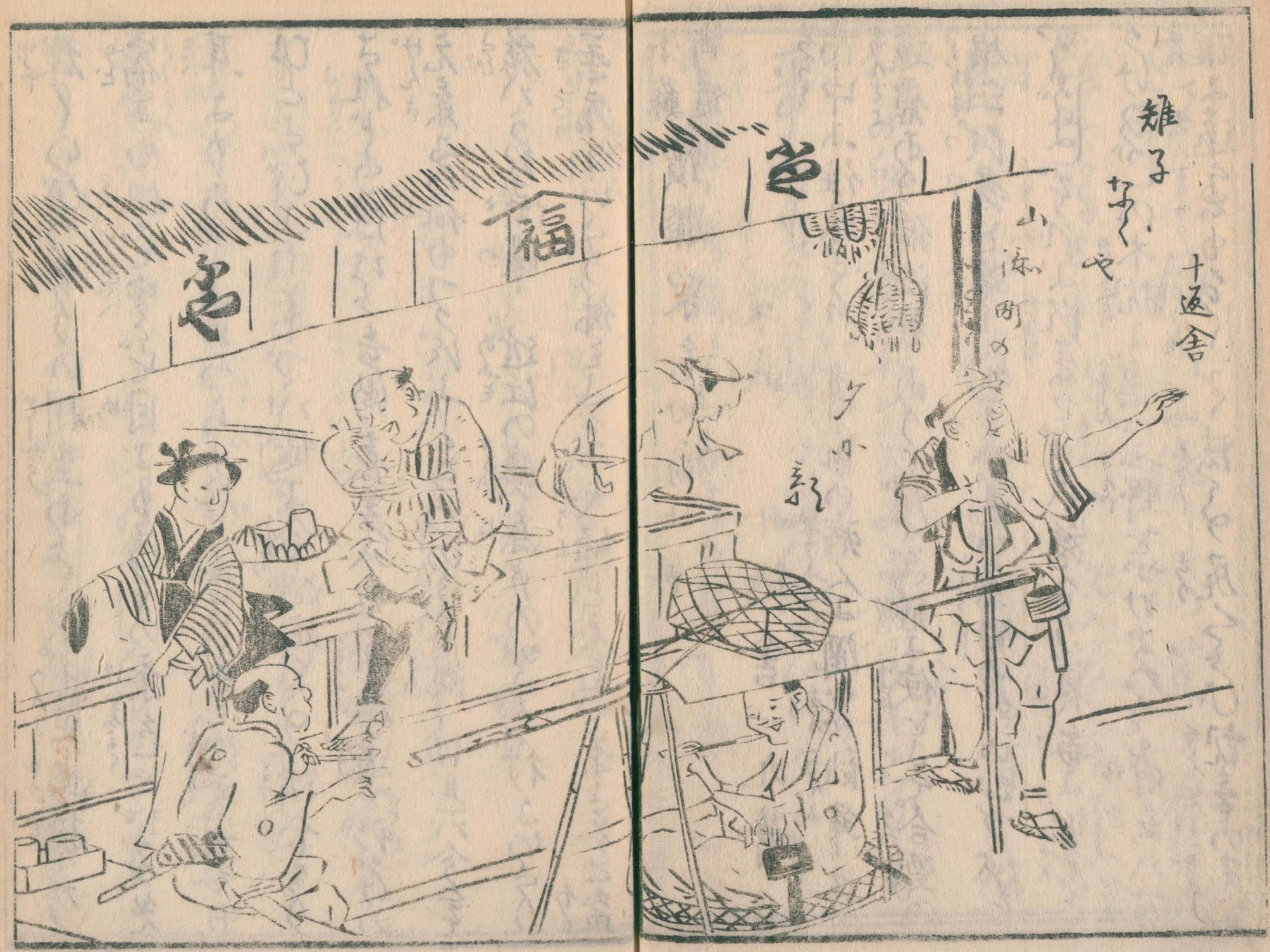
背利より烏帽子素袍を反りかへし
徳は若かりし世に出して舞ひし万歳
月立日の明けて年も改まる代
右東海道五編の序
て稼ぐるも旅の袴打屋して
旅の宮と渡らひ 出来ておもしろきのことを云ひ又ふたたび五編目に委し 福
寿の斉藤尾にても在京と承ちし人

大あらし今日吹かけし年　同上　大井河の
瀬はやさしきさゝなみを立て十を峠まさし
かへりけるまで浪人体の人と道連れ
わしのけても此月には福をとれしし
公まで此土てうしおろしみ 大井川中にはては八か 此の道の
其小御嶽伏見の稲荷のおすむき蓋井

の涼うて風ふき流しの山を吞て
猪を得せし始末今次の茶屋うち
馬の矢拔三階より出る所の
行の所の上をあらしたる
事ども多の得よ出る俗の白とし
ちやの秋限とおちはんあるすのうし

東武十返舍一九著

市中ふ往居されば降家の病人ゑ酒宴乱舞
遠慮あり。偏法華あり。たくき死ゑ使をゝそ。合巫の
唐白政舞を踊ゑひとしいはば。条目の外のおづひそ
ぶ。それゑ終ゑんせざるハ後ろ
ひけるの木枕ゑ魂ハ山野をかけまわり。来ゑ八百
誰ゑ遠慮もなくしく。法ゑ尼くゝひ観音の書



国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』　請求記号 120-53　ガラス使用

輝くいびつなりの利生あらくるる。遠江遠摩乃
宿ふも。飢ど寒ども。目よりも多くの糸をとなげん
耳よりうくのめづらし紙とて乗文書にも
ひとつとびよ十年づゝ隨と金と延るの清合なり。
されども孫ひろ長閑 嘉多八ま。東海道を行げけの
元来ハ他もつゝぶとろのうち減ーけとび合とを
旅から紀兵衛。近江の鏡。来ものがうむ村よいろう。
茶店よいろう体をるふ。夫婦とええて茶さげこ盗

お出扶投ーけとバ。かるゑ。あ。えあ人ど
夫婦ーて来ものかうへ東国由
さぞや。ひとろーる夜のたのーを
ト。けとち。外ちえかけーをうかをの男。コリヤ赤猪ふ。祐ちく
おりてのくーしうふかるふーあ
ありーふ。ッて。くまとろ。せんぞちの栗本ろ。ま。ちん
男めと。三太郎めが。会合て。りふ。行がけうーどちくあ
逐電ーちうーぶ。それようめて。ひとうふ。ものあ
おりうる。ちくて。ふて。ふてくれさろ。せいッリヤ。おぞい

ちつとものどくるをとでやート ふところより 筆木のりのごく
んぐてハテ 証体ハ天上火易ふ曰富貴天よあり
牡丹餅 柳よありとあれが 家業ひさんせるる。ば
失物ハいのきの出ちらどよるんであろうと言る
所よあるとんそんるあそとるてるてるの柳
隅よるりとすとりあげてあらどふるア
めっぷらいる。柳へあげてあるん。りんでやごさらね
ハテ 哀れるんでやアるでごさるる

ちらくコリヤ 行玉がつまるよるイヤこるこまるう。
コー行をつぶらるるどこのこるふくるが柳へあり上て
ふれどよ イヤくそれでの易のおりそよのんて
あるふと言い所よあるどてア遠ひきるん柳へ
るけらふや。暗居の上ら。天上裏あり とさばてんこの
この蔵でもくてくてくてくてくてくてあるこ
のうこる。桂馬の言あげりとりよこばあるるっ言ご
ろそ。柳よあげくるんとあられめく コリヤ おあ

まうでがさんしやうもなんにもいはっせる〻赤「身が出らくらく、
いうたれども、エヽアゝいやらしく　北八「ナニあなさんの
うちの聞かしやうと上出しやと見ひよんなさんか。
めんめい人をて、ふうをよ　赤「なんでおらがを
こうらうさんどの　北八「イヤてうらうさんでなけりや
なんぜいるが郷にあるとぬうしよう　赤「イヤぬかさしやれ
コノいかおつざいやつめト　ろうがいまやがおつきとるへてつゐきなる
馬子　北八「あの一番やさんさめめそでむしやぶりつく
女郎こうけへいそいそくまへあとても生まれさそふてうりの
うしくみんなへいしがやかて弥次郎の中をつけ　北八「コレ〳〵

「アあいつがふよろしやせん　赤「イヤ〳〵ようろしのそく
北八「わどれより身が出るがさうかしれぞト　こりかく火吹竹ふてあのそとまれかゞへ
弥次郎の頭を　弥次「あいた〳〵コリヤおいらをなぜぶつく
あうけりすると　北八「コノたわけめらめ。仲人をぶってをすむものか
これが桐のつばく〳〵トけんくわがむちやくちやにふるいふるのまや
あふさいちうそんじやう志やうのあんばい。
あとうりかけしばく。何やらやがれゝりてなるく。あさまけはや
ゆれるうりよるま上へとうもをつけさうち。二人ふてるの
弥次「ヒヽ〳〵　北八「ヤア〳〵〳〵二階なるが君よりをかじや
赤「ソレみんなみれなし見通しおやまに　弥次「ヤア〳〵そんなら。

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

コリヤなんの小便（せうべん）じや。きたない奴（やつ）じや〽小八「なんぼうなんぼ
嗅（かざ）いといふて、めつたにいふ事（こと）はいらぬ。さんざん目（め）に合（あ）せる
〽従者（とも）「顔（ひたひ）口（くち）がびしよびしよになつたわいの。コリヤどふしてく
れるのじや。全体（ぜんたい）そなたはこちやア、なぜ二階（にかい）へ小便（せうべん）を
あげておきやアがるのじや〽女房（にようぼう）「おきのどくなことでござりますが。コリヤ
なんとしたことでござりますか〽亭主（ていしゆ）「けさがけから二階（にかい）に居（を）るが
なんぞいふたのかいな。二階（にかい）に居（を）る人（ひと）はおのれはなんぞ。
おまへがたへ　ト此内なかにあがり居（ゐ）るうちのもの、二かいの板敷（いたじき）もふきと
ぬぐひけるうちよりあんたのぶ事でのしもあかでござんすれども
うけあがりなんぞいふたはしらぬが、それなら小便（せうべん）をしやんしたとおもふ
おりをせずへてさへよくのりあげてあれするなんぞと、ちよつとの事（こと）でござる
わへあがるきやは、あがれと言（い）はうのもなんのあるものにそでのしなわ　年生
いろくよしろ私とおもへさるとおりがとうれはどのやう
経気（けんき）のふてのうてゐなかへ入れもあるなりこころえおくびしやめると
なんへ客（きやく）の人（ひと）どもここへくるのひ合せるけれどもいふるとてあとのなんぎなる
ことをして、おりんとくらしてぶらふのなるとのうち此家のなるを言（い）ふ
よりうりのしくらしなんだりとこう二かいへ、ひきこのけおきするとさんへさりの
〽亭主（ていしゆ）「それよめくく。たかさやかろうどもかいのさかけの諸道（しよだう）に
なるさかでおらがそれよどのばうもなんぼとしておいさつと寄（よ）
斧（とう）ないどのくしてまちがひはおらがひがしのあることじや。
ソレおそらくこれはおそらくは是代（あしまどう）けさゝはなるがありよくぬ。

あんまりなる人をぢいよおめりうるむくひであらぢ
ロハ〳〵〳〵ト打ちゝゝひ出て面くらゐ女ぢうハ行ほうちゝ山ゑちゝんぢんくヨビ
あらくれ面ぢ沢ロろ〳〵ぜんそくさせ、衣ぬ移もつまをあらひし
熱灸よわ〳〵そのゝ色ありろ ともあ葉ゝり入るゝ〳〵ちんうゝるゝ〳〵ふゝろハこぢと
のひぢそゝホーゝゝちち出ゝ〳〵ぢあとハいくぐゝゼーゝゝ ちゝぢ
法ゝよ喧嘩させしハ二階うゝ
目ぐゝとゝうゝふゝねゝるの小役
かゝゝゝ今涙をうちるゝそゆくぼどろくゝ大関村とハふる
いる。たの例よ不破の関屋の跡ありとさて。
いふ〳〵ハ関の扉も関ふけん

あるまゝや鶏卵のふゝとくのさと
関が示を打越て難義山班女義子のお路の移よ
作〳〵きく班女が移やのあふぎとて
さくぞ名所の要ありべし
ゝのさ死小國街道の追分のうゝうゝ年の比四十
ゝうの男。木綿縞の羽おり小紋羽をさゝぐ。のゝ
色と脊屑ひ紫苞をさげるが。路ゝう銅をうゝ
ひとゝふゝゝゝんゝゝくうちぷの男 近辺のものとヨビ名ハ与太郎

「ナニ」おのさ達は。素井どまりでおるだ「いのさま」
りんそとてらでざぜへせう「与吉」素井どまりまら。田尾
やとしのへも出まんら。アそうと。ろくいやごあがありまら
「ガハ」ナニヤ。どめさア。ほうのことざろふ。そのうつこしい
ら絲「与吉」笠帯ろやアりまこは移へそこの内へとまりへ
せう「与吉」牙が笠の空帯じや。案内せざよ。サアく
いのぞやうらせく。トもそこの日もこれちうまりて。素井の新ふ
いうらの田ぞりや。とるえこ。ごそまりれて
与六 与作 さあ出ようそち「とうでやく。えーらふうまやふおうりへ

あらやういる「サアガハ」与太兵さるみうせんどのがハよ
人とざまらうふて。赤の皮あうよりふ出ればとでや。
「与吉」コリヤたらけさるのいのお。おろおそざ川て赤うこざ
トいうさるは男宴帯と見へていろて分せてそうこ「ホシ」て
ほ「ガハ」しきさ三十あまりの女。いりでできうて
えーらぶりでのろち風が吹ようりまら「小風」で
あふざろ。コリヤ「ガハ」こ陳そへるとでや「与吉」与太兵衛が
お出るじやあろふと。産婆ハチントあけてあれよりう
おーさ。ホシ二ざるこもよふおうりでおざり「与吉」サアく

あちらへお出なんしてトあんろんしてゆくのざしきへ「コウ」女中。
つれてゆくことや女茶をもちまり
その内は浮家はときんさぶ。六ちゃんさまの子供
元がゑんへるうらやまざぶ庭うらよ別まして間の箱へ
ちゃんと新茶の浮家さまざま「下女」イヤセりふ。七八年も流れの
連合はざりませね「流」そんなるあの子依れは進が
子ざ「下女」ヨホンとト 与茶合点はそれ合点ひるがかわてゆくあの
与茶与へといふは。近森の金ちゃんてぶうちのな
家をせとしてもくよんをどめるくそれ由へ後家の子依れ子を金の子なる
由へで女あいさろこまりこそうひてあげいざーるりのるざーげれども
与茶与へさあるは「近年」きんねんそいをとのあるやざめざんをんくよる

そよでおいの玄妻女どのの由ぴ。毎年子を産ようるが。又
おとーもかんよ孫をふくろいて居ようるへ流新乃
ちゃんを取るるでやトは月下女ぜんをまち出「ナニー」おちゃんぐる
与茶与へるとこるくくのかう
酒はどのでぴとうせちゃんくう「小」それはよおぜへせう
「与茶」コレおさざるい酒ちくと出そ生さろせへ。着へ何ーう
のちゃんかろい「下女」ちゃんまざりのむ紀ようがありようりあた
「与茶」ソレよろうざく。幸子味噌でりかろうそのっさふ
のそーそろまさろせへトは浅あるきようそ「これはお蕎麦」でそ

ぶぶうりまさとふぶうふ、ちあぶうりるあさんすーぞーてIB（ぜん）
風呂（ふろ）へ入（はい）るまひとるよ下女（げじょ）ぶぶうりのあること。
ぶぶてぜんゆこれてぶうり
グロウリ湯へ入（はい）るまひとるよ下女（げじょ）ぶぶうりのあること。
ぶぶてぜんゆこれてぶうり
ぶぶうりまさとふぶうふ、ちあぶうりるあさんすーぞーてIB（ぜん）
酒のまいりまあ（うぶ）ぶうりたんぶめ召せへ（ぶ）ドレいも敬（きょう）あ中
せうこりヤとかうまーまりるかうそ。ヨいトく〳〵。アい、
まうつべいとーさるるい酒ドヤ。ソレあげます召せ。ト（はたらくさま）
おさんつぶうりきゆうやどゃうりーーちりくとちあんぶめいてーま
時ぶ後家（ごけ）ぶうりくとうりきうと
せぶぶうりヤ持合（もちあい）せまのーぶ。上（あが）りヤせうこりヤイいぶぶよ世（せい）ぶ。

コリヤアおまへさ方も。よふお出なさるの御近所(ごきんじよ)でおござんす
やどのおとこ「北八「ナニこのものはとも連(づれ)じや。コレそこの内へおまりなさ
るとぞうって来なさるのじや「弥次「ちつとはいゝ後家(ごけ)じやと
きいて。おまへの所へ泊(とまり)なさるのさ「後家「ヲホヽヽヽ。おそくと
いたしなさる ト ぎん〳〵泊がかゝりて弥次郎北八も。そろ〳〵と
まぎ〳〵ながらあがる内へはいりしたるうち
あや後家のうちを「コリヤ〳〵酒(さけ)もはやくおくれよ。ごぜんもかけ
かゝ弥次
さい。いとおねぶたふなりよつさ「後家「ホヽヽヽのおかとこまり
ませぬ ト いふて出てゆくと。下女がよきさあんどんおもち来り。ざしきへ
なにかとひとつのせ。次のざしきへいれおくと弥次郎北八は

あるあげたへちやうしてさけが行わたり次の間あてがひ弥次郎へ一と
後家とひそ〳〵なにかはなしがはづむそのうちうつゝらいびきのまじへた
さへ北八きゝつけて 北八「いめへましいぜんなにをしてゐるやら
おきあがり
なんでもアノ親仁(おやぢ)めは。その後家(ごけ)をくどいてゐると見へるわへ
北八「そふさ。宰領(さいりやう)めがくどくそふさ あそこの間のつきあたりがぬれさと
あいつさ。気(き)のつくがいるしまつぞ あいつらはふだん
めへがイヤ三銭よせんべろ。むせうに腹(はら)がいれん。あのうへ
弥次「おのれも気(きやう)な虫(むし)がかぶつて来た。コリヤあそこへふれてゆく
ト せうちんへつけ出して出ゆくと北八も弥次郎のくるとさんら
り弥次郎ちんへ出てゆくと北八も弥次郎のあとにぶらり

ごてかりくのとーてうむーがかげうよる。アイタこと。コレ
ちくと爰さきうてこまこうせへ。コリヤどおこうんじや。
ちかいの毒みりのこふさおろへいあんよ。ヲホこと。あさ
ことばありよる。ヲホこと。イヤ笑ひ所じやあし。
こうめこいあんてやく。ヲホこと。あこちのえも。
いとむーがかげるといこうせるが。コリヤかふーこそのこと
あこうこうこのでおあびば。ソリヤどふでくこと。フノ
ヲーけもうふおまんのこを。毎年年くこ産よるもあそこ

のそ。ふくるその外咲ひるさまおそこふるすじちが今家のこと
こいおこうーておまのおこことちりひこうておこーこ茶
買こふて。辛子味噌の中へいまそのまことこうこうて
おきこうこことおこそこがちうちがへそこまこりいひ茶こと
つけて。茶碗へ出ふこそそれとこうおこうこうせへで。
おまいがこうこうせへこのじやふそれでむーこ
かげうこうのでおこばおるアーヤドアくそんなこう。
おこーこ茶紙牙が巻き者こうこじやな。アー理こそ。

たこの肉がひつくりかへるよふじやアイタゝゝゝ　ト はらをかゝへ

おりのたゞしときゝつけ。北八あわてとゞめ。「コウ弥次さんさんざん
ゆでむだこをかへながら大きなせがれこを

おりやまだしぐれもりとのませやアがつたと。そて

それより弥次へせうきじやア弥次へ「弥次 いめんかうしん。

まつきうき氣みじも弥次へせつぞとおもつておく。

ゴシエ宿(やど)の女らが酒(か)弥次へのませおいらは毒(どく)をくらつせ

やアがつた「アイタゝゝ コリヤかぶつてるそふな ト北八へ

くせ出し「コリヤこての後(ご)家(け)めよくも毒(どく)のんでゐるのりか

しやアがるじやア弥次へくめの銀ねつきまやアがれみぜ

あつしがきとりそのませせたア。あゝくるしいタゝゝゝ。

弥次さんたしやく出弥次へゑおまへ又りきてみていと

せわらんへ向く弥次「リナくもくま弥次へぞく。あゝまゆしろし
へつまざしゑへかぶりて

弥次へぞトとつかりざしゑのかをくにをふきたんがせが「もをぶぞ
よねち毎へのたこをきりとりねさり」後家もさんりで

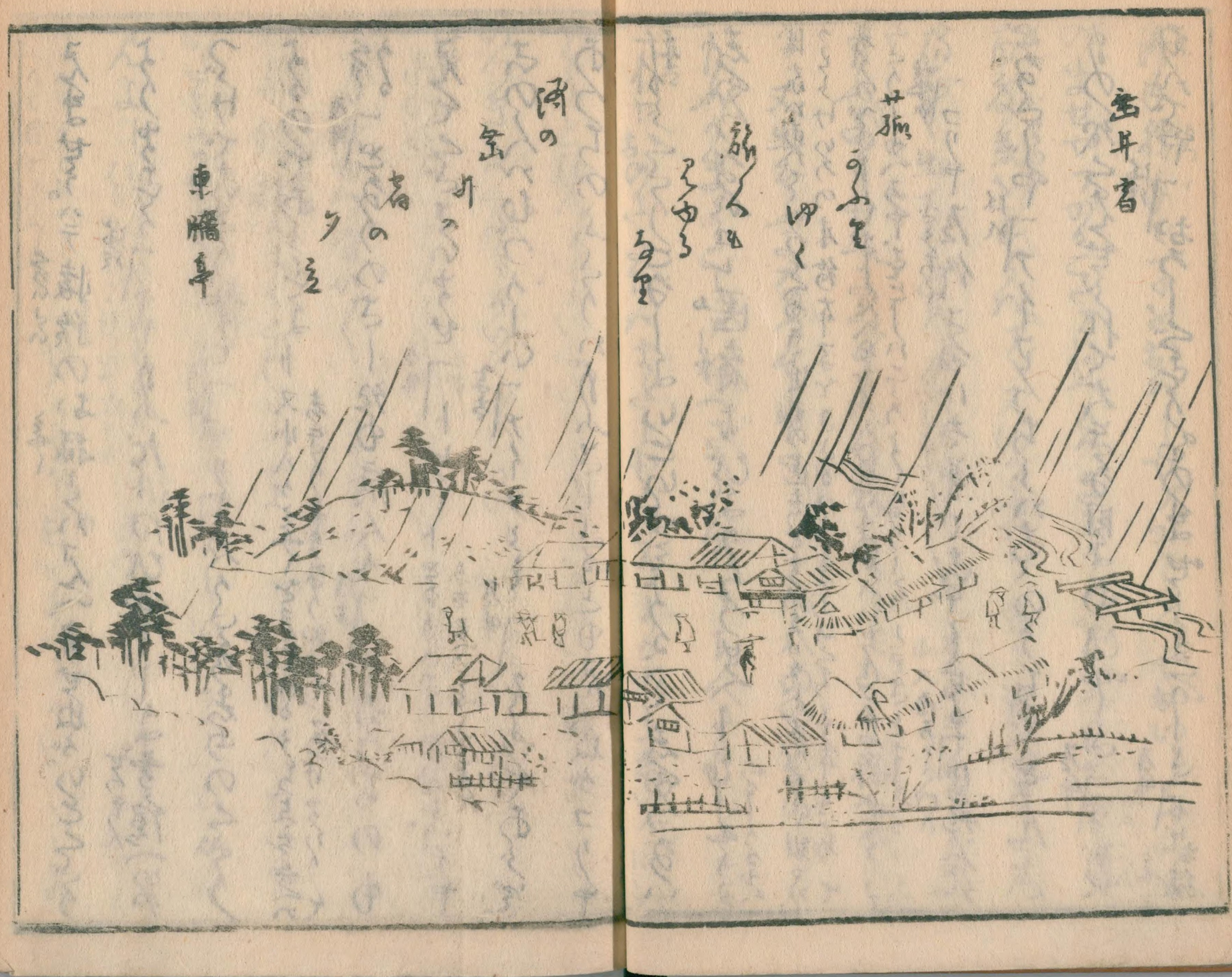
おまへつかまさろせへて下されませぽんのちくらしくや。

あのりこさあげよつてのじやあざんませねがくいまへ

がへておきのぞくみどあつりまして「弥次 ナここねらが

清水様でぞとおろーやァがるとうで。おいらふかんで
のませやァがることァねぐざろきまうとぐでうつけが。雷陽へ
百姓系とをるんぷァ、又いくあやァあら稼ぐぞさハ
んあく出てくまろ。おいらくくしト又ろけ半てゆくと。一朱ハ小ハいりろろの
ふざろせんくよくぐるんぷなんでもコリヤをを稼ぐそく
ハァ又出そのよるうくあさ。サァ少ハあいさぞいけく
ありかりまうこことァねぐざーえのうちくさられちろそふ
イヤ。おのさーちんまぐーものぐろうるかろあいぐ。

祈ろうぐろとるーよいといこことうるぐく。おあうるい
おあうるんコレ医者よびよからうせんトなりまうくるえ
後ろいあんてかうそくあき。近所の医者をうんひるとざうそくあるふ
うろうけいろの本物布子をきうる。ぼこをまおふうちをを年をうあて
ろうべうしくざーえへをるとぼ。ぼト小ハハせんとくえをうろ
こうーしあ、あや。をとーいこうろうくるうーこと。とをきとまぐるーき
こい。後家コリヤ。左作さる。ぼ。ぼ者でざぐぐせる。病人へか
ぐるさぐや。ほれアイコうちふかあてのうちぐぐんぐ
りの紙ろをせられてださる男さあひをーさ。ソリヤ
なんぐや。侍おろーぐぐろをのませぐまをーさ。ドロ。お縁



国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

ゑんまさうハテ後生のお孫とハゑんへゆきせぬがいとこぐう
ようゆきとろ（後）イヤりふだらつぴゆうーよ。雪隠へのが
つゞけでおぢうゆきと（左外）ツリヤ大うこあるものゝこぐう
るのであるゞとト又ホハがゑくとゑんてゆかうちよちきこへの
おきりようゆうりおしてごろげおりりて
ゐる（左外）とるりのざーゑも病人う（後）ハイあつちのも
ゑんそこでさいきせ（左外）トゝくトるりのぶーゑへゆく（後）イヤ
おのへかむづうーい（左）アイタヽヽ（左外）ちのこであるゞ。
あつちのふこうりかりふさーとるとゑもゑんへぬがコリヤ

あうとゆうーいぐぐうとるとるのが減一本さて
のうきをよこぐうりのてゆうのトうちうりちうりをを
（左）あのうくゆうタヽヽ（左外）おこでやくゝゆうとをうんよ
（左）アヽおゆうるふくく（左外）コリヤおまゆうのふ減ばゆゆ今ん。
お乳（後）行扱うりてくれさうせへ（後）エて行ゆゆゆゆゆいて
のこをうせぐよ（左外）そんるゆう。ちうくゆうのちんゆゆんて
ゑんよトおりうゆゆうんとゝとるよ（左）あのこくくトものーを
（左）ゑんこの皮へうれつゆてゆけど
ゆゝトうーうへをういつりて目とゑんうゆう（左外）ヤアコリヤ。目をゆ
あつくうゆうーいぐぐうあ

あのりとやら申ておつざん弥次「そめどうするでや。コレノ
おとゝの一だんめそこんせいす、イよちゝ医さるかァ
よちゝ兵さるかア医者「コリヤいこ申しえひどや。参へまへらず
ようらず弥次「コレノそこの袋艾をめてこひだんやう／＼く
ト此うち下女のだす「ハイ／＼めてきよりまし医者「サア
傘灸ドや。コレ居さんで居よるが足の爪先へまへく
さうせへ下女「こてでやく医者「ヨイ／＼。コリヤコレの
足ドや下女「ハテおまへのドやるけらおや。彌の足へまへく
ようまぜう医者「されバ彌の足がようう／＼ばあア弥次「そちの
お医者さまの前が先紺の病人の足ドやあらぞよ医者「ホヽ二
そふでや。そとふれゆんと気がつかのんだ。サア／＼こゝでや
あつでやト医者が与まへてめるが与た会への
ふきた「ハツくウヽし医者「あめくとあふようう／＼ぞく弥次「気れ
後ゆてあるいが。医者さまが此お猿の針ハどふさうせへ
なうそ医者「どうも格けんよ。ありさう／＼してやこ申んりい。
あまり郡山ふゆるらんドやあゝはとよ北八「そでこれが

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』　請求記号 120-53
ガラス使用

邪ケみるらすいりのら。芋まるとぶでけぬく
ひらだ「乃牛」そんるら鍬棍りてぶさんだ。たくきこんでおり
ぶる「後赤」そめうぶうういぶぬいくくきこさろせへすし
おぶでんお医者さるぶでや「乃牛」まるうちくく。コリヤ乃牛ざりさ
病ひがかくそはぬてぬけ・へどやあくぶとよいおのきこ
ざーてのくとード又外ふそうまそさるまぶれもぬけぶ。二本ヤ
ひいてもまやそもぬけぶとおまりのくこさくこ
病人そんるあて「後赤」コリヤ乃牛さるぶまうちのおあのさるふと
うくトうのそるる

ないてやいつまるぬいてぶうまとぶそのくろう入用の
りのがある。食慢ひとうとどえ結ぶまを把ふくまるとぶ
うえ杖まを牟と。雑まを牟りてぶざいそれでぬえるうがあるり
ようまるとトのふも「後赤」いそうくぬるぶくとうそうくくせ
ひびを牛ぶざんのめーとんのあえさきりあそすまをあ
あけ。それへのとうひをあるうようとぶーーふまをうげんまるでけどんと病人の
ごえとるるがの針のこへあせてあやひ。せるのくへりとるひをトるとるーてくーうまて
ひるとび「乃牛」サアく。ちくうちくと病人をてとせてとうぶざる
トーをかへてよちちへくとくとせ。おびをちめさせ。「アアコリヤトどふくろ
さそくあるくうさをさるそはえをりくをくと後ふきるをば」
せくまるとぶんるるすーて針がぬけぶとうるまるふ「乃牛」てうるまるふ

いさんでぱし針を習ふさ師匠の所へおのそのをひ
つまでいかなるのでござる。ザアくいざくせくト病人
手をひいてつれてゆく。後にも病気あるくありて。これくおとまつてゐたりしが
ゆくとぶれたり小八はおかしさをかんでおかしさをこらへてゐたりしが
此所でちよつとあたりのうちひとりのめくら目はなさるまいとさぞ言
ちうく とさうが抜けて今のつけしやうも病人のさかなき耳へ入そふらうび
稲ら 師匠「コウ小八どうぶざまめへが 小八「イヤさうだろうとよく
れぞ
あたらぶがおんぶをそうくして稲られねへ 師匠「そふさ
あふ何時ぶんだナニト気がふへちんと思ひ出して一日の
ま毎く思ひぶんへかへりての七つどきぶんぢよふか 小八「イヤそれ

やアがんすりさやまぶぶて道が滑べらら「ナこ
ふでも移へいてふもその時分うらうさん人があるめを、
時よあるりが清さポイちうとおやせうトもとさうひがこて
ろうトかあるりく
「おうびるのさんまーろ「コウ火をいりてこへ移へ匹て
りふ何時ごろ「ハイ七ッでもぶぶぶんまぶぶとトのひまろ、
ろうさうく
人をもり「あり「モシヒッるぶりかさちやせうめーり
のんぶうろへつける
「支度をしてくるせへ「ハイ〳〵「猫いりきまてけうう
やりせぶぶトかうさもくぶぶちふうかおきぶもぶるうひーさく
ぶどーうちいうるうて
おんなへてくる後さんへまろうよく
なりーい重義おうしぶうう
かくてはもくを打ちるぶぶうさんこし。夜風
冬水深ぶうそ滑ーくぶまぶ往来の人もんへさん
うそ乃程ある上ぶやの女はをうちぶぶて。七ッ時分
いひーい八ッ時分おて。世間滑りかうう。只並木の松風の
青のうあり「こりうへまぶ七ッあやアるぶ移へあんさらぶ。

さんぺいぞくと背中をつきとる
ようぢやむらのよが燃るなんどころ「エヤあく」
ふるひがとる。ハアきこへさ。あれわ人をあく焼場であろう
ト云る目さえぴくくと「エヤきこの」小八
どんでもくれひとびき
コヽさむやのく「なんどころ」
なうて。殿中がるくて寒さト
何ヶ寒白なものが出さぜ「大」
あつさく肝を使させ。時よりとんど夜添さ出うけさ。

さんぺいぞくよ辻番のそうる形ぶんへるナニトこでいつぷく
のんでのみちつと夜明あよるうちよ出うけよ「小八」
移へう「小八」いろさあそふまちやせうト「なの辻番とおぢ所説る呼んだ
ぶうしーアきそろくしとあけそんりうふそうはいてよふろーきづこみ相油をと
まきかのとーて体こおーるがまづふくしとそんのあーをきこへ辻番のこ
らづ移るふそうがれひとうハ「コリヤ」ちくくとの間へよかりだ。
さんぶひとうハ男のこへあて
雪うくらハおのさを移つくいようてこのどや。サテくあくへこのう
なさん「女」ヒーがけよおそくなるぶそ「男」ハうちくとふくくだ。
ヒーそのどんあやア朱塗の様「千八」置あてやをどそ「女」こうう

ハア。嫉妬(やきもち)の下種(げす)アやめてくださりませ〽男「ヲヽサおれもちつとさ。
おれもちつとちくちく ト いひつゝおつれてこの辻堂のかうし戸をあけてはいれども まとよりくらやみの事なれば外に人のあるともしらず
男「ヲレ此暗(くらがり)に腹立(はらだて)ちがある。おのさひとりくれませう。
女「そりやよからきつくとし がねにひかげねひとりと
いふぞと。なんのかのいませんか 男「サアくわんせまでやく ト
おの女もちとむまかりく こゝまでまかりながら あんまりなくいちやはくそれがしハ いきなころしてねるがひざのあふ行きれのありしとそつてこのおとこがゑへと
目をさまちよん 男「アイタヽヽヽ コリヤ何をしやる 女「なんでや。
とはけた
コレ何もせぬとしれたわるひよ ト いひ女のそへと目をさまされうとつくしてみれば あまりのこぶしと乃

のうりとろさへ女「あゝ、〓〓ヲ、いたいたいかなしい
ふらりとよびあがりて
なんだコレ此の尻(しり)はつつはつきさすのさる 男「ナニコレ はつく
すので 女「アイタヽヽヽアレまんぞはつはつきよる 男「コレ、
ちくちくいふな。アイタヽヽ。イヤおまへとアレ又あなさ
あいたく。ゴリヤ何をしやるだアイタヽヽ 女「コレ此アイタ
ト ふたりはむせうにくつせうけれど ひさがるときにて八 弥次「ハヽヽ
おかしくハ弥次もとこえへたてやさしい 北八「ハヽヽ
ト大きにわらひ出せバふたりはあきれる 北八「ひんぞ
わらくさんあるくけ出しいろさんようげて出く
殺生(せつしやう)さーぱりちつとコレハたまらぬ。おもしろく〃

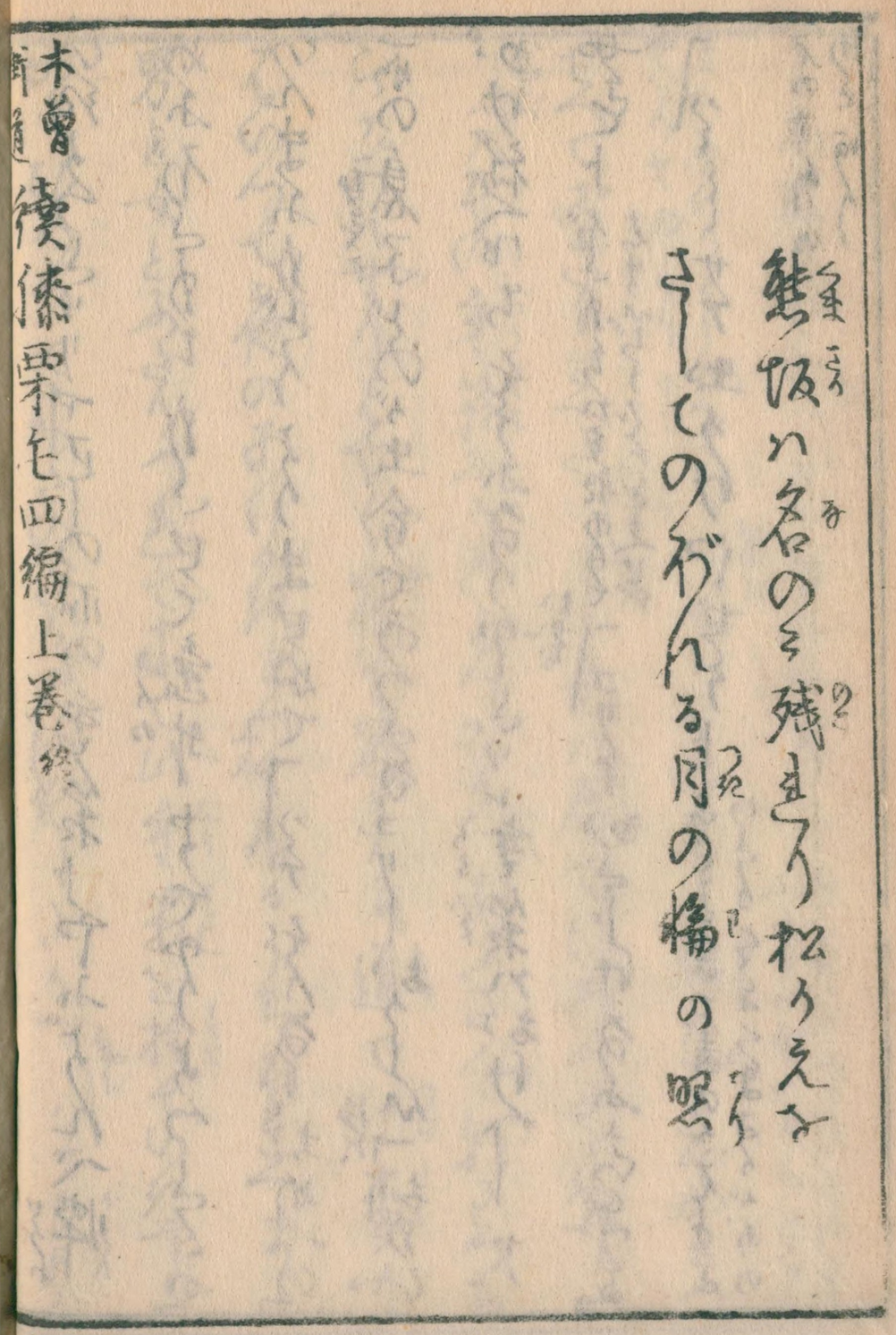
あの紙　弥次「ホンにいづくのうらでも、名をそろへてゐるさうな
狂人ものゝやうな
観音のおつきてうちあらし辻堂よ
ふかく根本の尻からひ跡
此時たちや往来の人群して。助郷馬の鈴乃音。
「弥二く　富士の「伏見ん女を　危い情が深みよへ。おまへの
朝飯までの世ちかうなれどさへ　ドウく　弥次「ヨヤ　あかい日がめへ
るくしさせト　北八しばらく戸をひらきてみれバ、たちや、宋の方より歩み
くるはぎやしとそふたりの折られ出人とうしてみえた。

あつい、しくてを　北八「ハゝゝ今の女が狼唄でぽつんとあのものと
しとてすつかり
コレこれていきやアがつた　トつえをとそられがおくうたとへ　弥次「やり
コリヤいゝものさきに八のりていつうせへ　トこゝそこ
中仙道六酒さかなの進物み「おきとやりせへまし。茶のみ
だんごのんでおぶらつせへまし「ナニといつがく
やせうトちやうせくるのもよ　弥次「おつで今の女の紙茶のうけ
出さうし　北八「ホンニそれよくトいろさげてきさんし
いとしてらひかるとちや屋のだで目をとをさせて「あれをとんさうせへ
これをとゝておくりしがやがておぼつかなやき

ようあねとでヤ「ヲヽ」ゑんよるアトらでぐあーぎそのイ。
おへこまりうーろへまろろ「モモ」そのぐあさ膝かどこでかるろ
てゑんそねよりー「ガ」
せへておぐろ出へさ「ナアニ」芸ハ居でひろうて来ゆさ
「ハア」その寺ぬぐふ入ま「ろうて」「そ」ふさ怒ろち
らこのへまりたやく宿をころころ。道で辻歩へ
えのうて。夜のあけ紙まろて居るうちでそこへまこ
男と女とあこりづまで来て。代手紙を捨てのあゆこ
めろ。ひろうて来このぐろ。とふぞーしさらへ「ハテ」合点ら

いねようこりリヤヒーの亦の手紙じゃやふぷんべ悴
めふぐこまちりこせて意外ちでゆりよろこふ。
いんまふめどろうませぬて「ハテ」そんるこ「おめ」の
亦の息子どのが出合でのうこる。コリヤ「あろん」「川」あるひ
がけ移へぬちそうふるのゆこ。ソレ手紙かおけへ「ヤ」
ゆこヒトぐこまちれこ亦のけて「コリヤ」ゆこ「ぐけ」るのふぐこる。
「ハヽヽヽ」サア出ろけやせうトきこ「ぐこ」で青のぐこてろる
ろこるこ。ころこまこぐあの
人のきんの
あこ。ゆろ

120
43
53



本曾道 續膝栗毛四編上卷終

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53
ガラス使用

120
43
53

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』 請求記号 120-53

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『道中膝栗毛 8編続12編』　請求記号 120-53

ガラス使用